

華北農村における近代化と通婚関係

—— 欒城県寺北柴村の事例に基づく一考察 ——

李 恩 民



1 満鉄調査村の再調査の 活発化と寺北柴村

一九四〇年十一月—一九四二年十一月、日中戦争のさなか、満鉄調査部に属する研究者を中心とする調査班によって、中国華北の諸村落、すなわち河北省順義県沙井村（現北京市所屬）・河北省欒城県寺北柴村・河北省昌黎県侯家营・河北省良郷県吳店村（現北京市房山区所屬）・山東省歴城県冷水溝莊（現濟南市所屬）・山東省恩県後夏寨（現平原県所屬）等の村を対象に、農村の「法的慣行」につい

ての総合的な調査が実施された。この調査計画の政治背景や調査員の研究姿勢、あるいは現地調査の技術・方法に関して、また侵略戦争下に軍事力の保護を受けて実施された植民地調査であるという点について、戦後さまざまな立場からの批判がなされているが、農民との応答をそのままの形で記録したこの調査の集大成である『中国農村慣行調査』（主六卷、一九五二年—五八年刊行）の資料的意義は、近年高く評価されている。それは「革命以前の中国農村社会の実情を検討する上で他に類を見ない貴重な文献」とされ、また「現代経済人類学の方法をもってなされた中国農村研究に関する数量的に最大、かつ極めて豊富な資料であると

ともに、質的にも、本世紀前半における世界の他のすべての小農社会に関する資料よりもすぐれた資料であろう」ともされている。このように同調査が中国農村に関心をもつ多くの研究者に注目されたことを背景に、一九七〇年代以来、中国や日本やアメリカ等において結成されたいくつかの研究グループは、かつての調査村を追跡調査できる機会が一日も早く訪れることを待望していた。しかしながら、中国国内の諸事情によって中国政府は長い間外国人研究者が希望する農村実態調査の許可を与えることに慎重であった。

一九八〇年代以降、農村経済体制の改革や対外開放が比較的順調に進展するにつれて、中国は外国人研究者に対しても農村の門戸を開いて、国内外の研究者による入村調査も徐々に行われるようになっていった。当初は、調査できる村落の多くは、特殊な経済政策によって発展した豊かな村であり、モデル村であったが、後に改革開放の深化に伴い、未開放地区や貧しい村での実態調査に対する規制も緩和されるようになった。その結果、多くの歴史学・文化人類学・社会学・経済学の研究者達が、自ら希望する調査地に入って当該地域の社会の内実接近し、中国農村研究の質をいっそう高めることも可能となった。たとえば徐経澤、楊善民、フィリップ・ホアン (Huang, Philip)、プラセンジット・ドアラ (Dhara, Prasentjit)、石田浩、中生勝美、

三谷孝、内山雅生(以下では敬称を略す)らは、相次いでかつて満鉄調査班が調査した村落である沙井村・呉店村・冷水溝・後夏寨等に入村し、追跡調査を行った。またその中の多くの研究者は、これらの村での再調査にあたって、一回だけではなく、数回にもわたって大規模の本格調査と小規模の補完調査をおこなっており、満鉄調査村に対する再調査は一つの研究現象となつて、再調査ブームと称してもおかしくない程の活況を呈した。

満鉄の慣行調査班は、寺北柴村において一九四〇年十一月の第一次調査を皮切りに、一九四一年五月六月の第二次、同年十一月の第三次、一九四二年二月三月の第四次の計四回の重点的な調査を実施し、その記録は『中国農村慣行調査』第三巻として一九五五年に刊行された。寺北柴村は同調査の六つの村落の中でも貧しい部類の村であり、また都市化・商業化されつつある現在の華北農村の中に残る「農村らしき農村」であるため、一九八〇年代までは、研究者の入村調査の申出はほとんど却下されていたが、その後状況は一変して、多くの研究者を迎えるに至った。寺北柴村の再調査の歴史を簡単にふりかえってみると、大体二つの時期に分けられる。

第一の時期は、一九八〇年代における予備調査ともいえる「参観的な調査」あるいは「参与観察的な農村実態調査」であった。この時期には、再調査の先陣を切った日本

の研究者によって五回にわたり寺北柴村の参観や寺北柴村の村民との接触が試みられた。慣行調査以来四十一年ぶりにこの村に入った最初の日本人は日中旅行社の辻田順一であった。一九八三年十一月二十八日、同氏は寺北柴村を訪れ、村の概況を聞いた。翌年（一九八四）、関西の中国農村慣行調査研究会（その後「中国農村経済発展研究会」と改称）のメンバーである石田浩、田尻利、川井悟、田中恭子、二宮一郎、奥村哲、黒田明伸、深尾葉子等十一人が「中国農村経済学者学術友好訪華団」を結成して訪中し、寺北柴村訪問を希望したが、村までの交通が不便であるとの理由で、村に足を踏み入れることはできなかった。しかし、河北省中国青年連合会の計らいによって、八月二十六日に同村書記の徐孟祥を石家荘のホテルに招いて聞き取り調査を実施した。同年十二月一日、アジア経済研究所の小林弘二は、農村経済調査のため寺北柴村を訪れ、村の幹部から話を聞き、帰国後その経緯と成果を「見聞記」として発表した。

戦後第四番目に寺北柴村を訪問したのは、東京の「中国農村慣行調査研究会」のメンバーであった。一九八六年夏、同研究会の三谷孝、内山雅生、浜口允子、秦惟人、中生勝美等九人は「中国社会経済史学術交流訪中団」を結成して訪中し、八月七日に、寺北柴村を訪れ、徐孟祥、張仲寅、趙球子三人の村民に二時間余りインタビューした後、村内

をも参観した。ほぼ二年後の一九八八年五月十一日、三谷孝、姫田光義などの八人は、寺北柴村に入り、書記郝同順、村長郝小六、元書記徐孟祥および会計趙球子、張仲寅の五人の村民に聞き取り調査を実施した上で、村民の住宅なども見学した。

以上のように、日本の研究者は、寺北柴村がこの五十年間にどのように変化したかを知るために再調査を希望し、そこで得られた成果を慣行調査の資料と比較・考察することによって同村ひいては華北農村の社会変化の特質または歴史的变化を分析することを目指したが、当時の政治的な制約から、第一の時期において寺北柴村で実現できた調査は、ただ「参観的な調査」の段階にとどまった。それに基づいて発表された報告も、当然ながら村の概況の一端に触れたものにすぎず、マクロ・レベルの一般的な現状分析を越えることはなかった。

一九九〇年代になると、第二の時期、つまり「調査」の名にふさわしい「真の現地調査」の時期に入った。この時期には、北アメリカの研究者を皮切りにして、中国側の協力者との「共同研究」という形をとった寺北柴村の本格的な実態調査が実施された。一九九二年三月下旬、トロント大学のローレン・ブランド（Brandt Loren）を中心とする北アメリカ中国農村研究グループの研究者が、中国国家計画委員会国土研究所李北方などの協力を得て、寺北柴村

で農村経済のサンプル調査を実施した。¹⁰⁾二年半後、このローレン・プラントならびにスタンフォード大学のスコット・ロツェル (Rozelle, Scott)、世界銀行人口及び人口資源部職員ポール・グルー (Glewwe Paul) が結成した「華北農村農戸状況調査課題組」が、一九九四年九月十八日～二十一日の期間、中国農業部農業研究センターの杜鷹、白南生、方炎などと共同で寺北柴村で農家経済状況についてアンケート試行調査を実施した。

東京の「中国農村慣行調査研究会」の三谷孝、内山雅生、笠原十九司、リンダ・グロープ、末次玲子、浜口允子、佐藤宏、中生勝美などは、一九九〇年以来、南開大学の魏宏運、張洪祥、左志遠など歴史教授との緊密な協力関係の下に、「日中合同調査」という形で、慣行調査村落の再調査を進めてきた。このグループは寺北柴村の再調査を実施する前に、沙井村（一九九〇年八月と一九九四年八月）、呉店村（一九九〇年八月）、後夏寨（一九九三年三～四月と一九九四年八月）および天津市静海県馮家村（一九九一年八月と一九九三年三～四月）で、すでに再調査を実施していた。一九九四年十一月から一九九五年二月までの時期に、佐藤宏以外の上記のメンバーおよび研究協力者としての張思、李恩民、小田則子は、二隊に分かれて寺北柴村の再調査に向かった。第一隊は一九九四年十二月二十四日～三十日の期間に、欒城県・孟董莊郷・寺北柴村のそれぞれの概

況を把握するとともに、約三十人の村民に対してインタビュー調査を実施し、戦前の地図を参照して寺北柴村住宅地図を作成した。第二隊は一九九五年二月十八～二十四日の期間に、寺北柴村においてやはり約三十人のインタビュー調査を実施するとともに、村の経済関係統計資料を収集し、さらに調査票の配布によって村の総戸数と人口をもより正確に把握することに努めた。

一九九五年夏、寺北柴村の村民は農繁期の最中に、中外共同調査者のグループを三回にわたって迎えることになった。八月中、北アメリカの「華北農村農戸状況調査課題組」が寺北柴村で農家経済アンケート正式調査を行った後、韓国ソウル大学の金光億が北京大学関係者の協力を得て、同大学の生徒とともに寺北柴村に入り、村民の経済状況を調査したといわれる。一方、東京の「中国農村慣行調査研究会」は、『中国農村慣行調査』の記述を参照して前年度の調査記録を作成するとともに、その不十分であった点をよく検討し、新たな課題を議論しつつ調査計画を策定して準備を進めた。九月七日～十四日にかけて、同研究会のメンバー全員ならび研究協力者の李恩民、小田則子は再び寺北柴村に入り、年齢層別アンケート調査・住宅地図の補訂・主要家系図の作成・清雍正以降の土地や宅地売買文書の複写などを行うとともに、前年度に引き続いて高齢の村民・郷や村の幹部を対象とする聞き取り調査を行った。また、寺

北柴村の特徴を明らかにするために近隣の北五里鋪を訪れて同村の概況調査を行い、寺北柴村から嫁いできた女性やかつて寺北柴村で教鞭をとっていた教師を含む十七名の村民に十八回聞き取り調査をも実施した。

以上のように、第二の時期においては、各国の研究者が寺北柴村で一九四〇年代の慣行調査に劣らない、ひいては歴史的条件や国際環境などが当時とは大きく変化したためより質の高い調査を行ったといえるだろう。その中で、調査規模の大きさ・期間の長さ・範囲や領域の広さから見れば、最も実り多い成果を上げたのは東京の「中国農村慣行調査研究会」の調査である。同研究会の調査では、貴重な文献資料を収集したことはいうまでもないが、単に聞き取り調査だけを例として挙げてみても、県や郷の工業・農業・農芸・教育・宗教などの責任者を含む寺北柴村および北五里鋪の村民一四四名に対して、一回にあたり平均二時間のペースで、一七一回のインタビューをおこなって、約百三十万字的の調査報告書を作成した。本稿はこの調査記録およびデータを基本資料として、先行研究を参考にしながら、寺北柴村の通婚関係の変遷の分析を通して、近代化過程において華北の「農村らしき農村」の伝統がどこまで根底的に変革されたのか考察を試みたものである。

2 寺北柴村における 通婚関係の伝統と変革

通婚圏は婚姻関係の範囲と集中度を示すところの標識であり、またその背後にある各種の社会関係や時代の変化を量的に測定できる有力な手がかりの一つでもある。したがって、従来、研究者は通婚圏の変遷を伝統社会から近代社会への移行過程における社会変動の客観的指標として位置付けているのである。解放前の寺北柴村の通婚圏については、一九四〇年代の慣行調査において既に多くの資料とデータが蓄積されていて、それらを源泉として書かれた論文^①も示唆に富んでいるが、本節は今まであまり研究なされていない解放前と解放後における寺北柴村通婚関係の変遷について検証したい。

ところで、周知のように、通婚圏は婚姻の空間的ひろがりに着目する地理的通婚圏と、婚姻当事者の血縁・階層・職業・宗教などの属性間の通婚を対象とする社会的通婚圏にわけられているが、宗教的な信仰をもっていない、また基本的に農民相互間での結婚が行われている寺北柴村^②では、後者に関する考察はほとんど何の意味もない。というのは、現代中国では、都市への人口集中の抑制のため効果的に機能している戸籍制度によって、農民と非農民の戸

籍上の区分は階層的あるいは身分的な意味を持つようになっており、社会的地位の重要な指標ともなったため、伝統的あるいは未発達な農村社会においては、農民と非農民、特に非農業戸籍の女性と農業戸籍の男性の結婚は、社会階層の上昇を伴う上方婚と見られてしまい、なかなか実現できないことである。したがって、ここに言う通婚圏とは婚姻にともなう移動の範囲のことであり、地理的通婚圏を指すものである。

われわれの調査では、通婚圏についてのアンケート調査は行われていなかったが、応答者に対してライフ・ヒストリーや家族構成などを聞き取る際に、これらの情報を入力することが可能となった。その結果として最低限一四例（うち婚入者六十七人、婚出者四十七人）についての完全情報が得られたこと^④、次の第1表「寺北柴村婚入者統計表」と第2表「寺北柴村婚出者統計表」を作成した。また、村・郷・県・省別の縁組みを示すために上記の二表をもとに第3表「寺北柴村における村内婚と村外婚統計表」を作成した。

上記の三つの表の統計結果とわれわれのインタビューの記録に基づいて得られた資料を、一九四〇年代の慣行調査の記録と対照した結果、この五十年間における寺北柴村の通婚関係には次のような特徴が伺える。

「同村少婚」と「同姓不婚」の伝統は継承

一般的に言って、中国農村の通婚圏は範圍自体が相対的に狭く、村内婚率も低い。寺北柴村も例外ではない。満鉄の慣行調査によれば、一九四〇年代初期の同村では「永年の習慣」で村内婚は殆どやらないことになっている^⑤。その理由の一つは「同姓不婚」である。「同姓不婚」は父系血族の間での通婚を禁止する「同族不婚」制度から変質したものであると考えられる。五十年前の満鉄調査には、「同姓不同族」であつても同姓結婚を避けた方が安全だと一般の村民が考えているように見える応答が記録されている。すなわち、「同姓不同宗の人の結婚はあるか」ある、「本村にもあるのではないか」郝姓にはない、「他姓にはないか」ない、「同宗ということをいうか」いう、「同姓不同宗の結婚はよいか悪いか」不同宗でも昔は同族だから不合法、「同姓は昔は同族だつたと思つてゐるか」思つてゐる」と。五十年後の再調査においては、村民の上記のような発想がすでになくなったことを、われわれは発見した。趙栓柱は寺北柴村の趙姓の人が「一族だから」結婚できないとの事情を説明した後、「もしも外村の趙姓だつたら、この村の趙姓と結婚できるか」との質疑に対して、「同姓は関係ない。重要なのは一族でないこと」と答えた^⑥。村民の間に「同族不婚≠同姓不婚」の認識があることは明らかにさ

第1表 寺北柴村婚入者統計表

所属郷	通婚関係村/県	婚入者数	寺北柴村からの距離	合計
孟董荘郷	寺北柴村	3	0	22
	孟董荘	1	3~4	
	河荘	1	2	
	崗頭村	3	2	
	北十里鋪	2	5	
	北五里鋪	3	2~3	
	北長村	2	5	
	白佛趙村	1	10	
	喬李荘	2	8	
	圪塔頭村	1	7	
樂城鎮	東牛村	3	4~5	11
	鼎城	4	4	
	高家荘	3	4	
	榆林道村	1	4~5	
	孟家園	1	4~5	
聶家荘郷	王家荘	2	3	6
	聶家荘	2	5~6	
	小周村	2	4	
柳林屯郷	胡家寨	1	7	3
	東柴村	1	6	
	柳林屯	1	14~15	
南高郷	蘇家油坊	1	5	4
	城郎村	1	11~12	
	北高村	1	20	
西安荘郷	龍化村	2	13~14	2
	温家荘	1	15~16	
	西安荘	1	20	
馬家荘郷	西宮村	1	12	11
	内營	1	5~6	
	大裴村	2	5~6	
	焦家荘	1	6	
	彪冢村	2	5~6	
	李家荘	1	8~9	
	柴趙村	2	11~12	
	南李村	1	11~12	
	馬家荘	1	5~6	
	東營村	1	18~19	
洽河鎮	端固荘	1	6	3
	潯陽村	2	6~7	
鄆馬郷	宋北村	1	10	1
県外	承德	1	50里以遠	3
	趙県	1	40	
	蒿城市堤上村	1	12	
合計				67

第2表 寺北柴村婚出者統計表

所属郷	通婚関係村/県	婚出者数	寺北柴村からの距離	合計
孟董荘郷	孟董荘	3	3~4	15
	河荘	1	2	
	崗頭村	3	2	
	北十里鋪	4	5	
	北五里鋪	2	2~3	
	圪塔頭村	1	7	
	東牛村	1	4~5	
	樂城鎮	鼎城	4	
高家荘	1	4		
孟家園	2	4~5		
聶家荘郷	朱家荘	1	1~2	3
	大周村	1	4	
	南柴村	1	5~6	
柳林屯郷	張村	1	7~8	1
西安荘郷	西宮村	1	12	1
馬家荘郷	内營	1	5~6	5
	大裴村	1	5~6	
	李家荘	1	8~9	
	八里荘	1	11~12	
	西董鋪	1	10	
洽河鎮	端固荘	1	6	6
	南客村	1	4~5	
	東客村	1	5~6	
	南留村	1	8	
	乏馬村	2	12	
鄆馬郷	段幹村	1	5	1
樓底郷	西洋市村	2	20	4
	西許營村	1	25	
	邵家荘	1	24~25	
方村郷	荆壁村	1	25	1
西營郷	沿村	1	14~15	2
	張家辛莊	1	20	
県外	石家荘	1	50	1
合計				47

(A) 俗語の「鼎城」とはそこに含まれる「東大街」「西大街」「東関」「南関」「西関」「北関」のいずれかあるいはすべてをさす。(B) 蘇家油坊は自然村であるが、村の東1キロにある張村と一つの行政村となっているため、行政的には張村に所属している。(C) 俗語の「西宮村」とは「西宮一村」か「西宮二村」のことを指す。(D) 俗語の「彪冢村」とは「後彪冢村」か「前彪冢村」のことを指す。(E) 俗語の「荆壁村」とは「東荆壁村」か「西荆壁村」のことを指す。

第3表 寺北柴村における村内婚と村外婚統計表

	婚入者数	婚出者数	説明
村内婚	3	0	
郷内婚	22	15	村内婚も含む
県内婚	64	46	郷内婚も含む
隣接県婚	2	0	
省内婚	1	1	
総数	67	47	

とが人口資質の向上と関わる問題であると認識する視点から見れば、こうした「同村少婚」および「同姓不婚」の習慣は、良い伝統であり、今後も「永年の習慣」として維持され続けていくだろう。

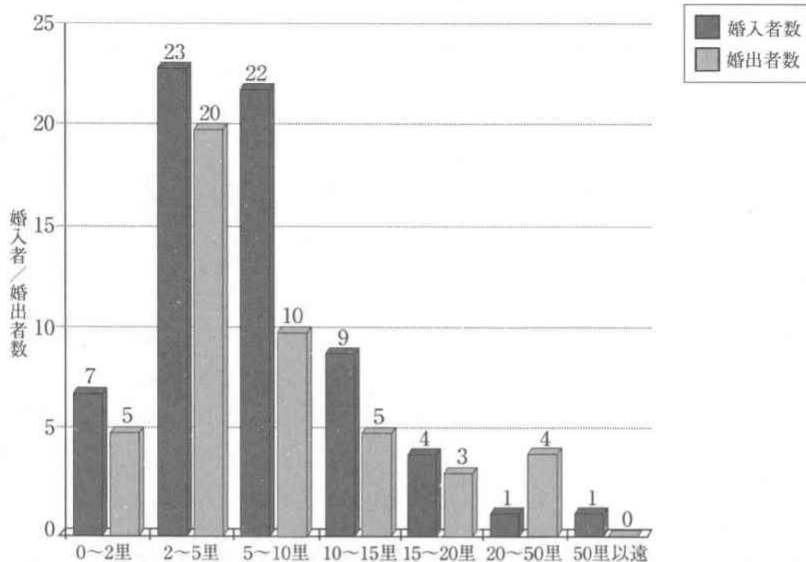
通婚ブロックは郷内と隣接郷

寺北柴村の村外婚をみてみると、同村が所属している孟董荘郷内の通婚数が最も多く、婚入者が二十二組（村内婚）

れた。とはいえ、「基本的に余所の村の者と結婚する」とは現実となっている。実際の例を見ると、われわれが取り上げた一四組の婚姻関係者のうち、村内婚はわずか三組だけで、二・六%を占めるだけにすぎない。そして、この三組のうち、同姓のカップルはただ一組郝姓だけであった。また、残り六十四組の婚入者は全部村外婚であるが、その中でも同姓カップルは二組（劉姓・趙姓）しかなかった。近親婚率を低く抑えるこ

を含む）、婚出者が十五組、それぞれ三二・八%、三二・九%を占めている。つまり寺北柴村では同一郷内の他村からの嫁入り頻度と他村への婚出の頻度が共にもっとも高いことになる。また、他郷と寺北柴村との通婚関係を考察してみると、孟董荘郷の次に、婚入と婚出のいずれも樂城鎮と馬家荘郷は二、三位となっており、この鎮と郷はともに孟董荘郷に隣接し、寺北柴村寄りに位置している。したがって、寺北柴村の通婚には「郷内婚率」と「隣接郷婚率」が高いと判断できる。ここで特に留意すべきことは、通婚者数の多い村は、寺北柴村の南側つまり県城の近くに比較的分布しており、寺北柴村の北側にその分布は少ない。この点から当然推定されることは、人口の向都市的移動ということである。これは現代中国における人口都市化と並行したものであり、農村の新しい動きとも言えよう。

上記の「郷内婚」と「隣接郷婚」の婚率が高いことから、寺北柴村の通婚関係は基本的に樂城県内で行われているといえるだろう。第1表と第2表が示したように、寺北柴村の「県外」結婚は四組の例があるというものの、そのうちの二組が樂城県の東と東南方面に隣接する趙県と蒿城市（堤上村）からの嫁入りで、距離的には県内他郷と大差がないところである。注目すべきは承徳からの嫁入りが一例ある点である。婚入者は郝ETの妻で、「どうして（そんな遠いところから）ここに来たのか」の問いに、彼女の夫は



寺北柴村通婚距離

「彼女の家は食べ物が無くてここに来た」と答えている、つまりこれは婚姻の慣行に基づいて二人が結ばれたものではなく、特殊な理由（飢饉のため実家を離れ寺北柴村にやってきた）による特有のケースである。

通婚距離と社交範囲の拡大

農村の通婚距離については、農民たちの日常感覚からすれば十里（華里、以下同じ）以上は遠いとされている。寺北柴村の通婚距離が近いか遠いかを判定するため、筆者は第1表と第2表をもとにグラフ「寺北柴村通婚距離」を作成した。

このグラフから見るとれるように、寺北柴村の通婚の三七・八%（二一四組のうち四十三組）と二八・一%（三十二組）がそれぞれ二―五里、五―十里の範囲に集中している。両方を合わせて計算すれば、同村の通婚が二―十里の範囲で盛んに行われることが分かった。一九四〇年代には、寺北柴村を中心に半径十里の円周を描くと、被調査者の九五・七%までが円周内に入り、寺北柴村の通婚圏は非常に狭いと先行研究による指摘がなされている。この指摘と比較して寺北柴村の通婚圏の変化がうかがえる。一九九〇年代においては、十里までに結婚した人の数は七六・三%、二十里までの婚姻関係者は九四・七%を占めている。つまり寺北柴村の通婚圏は五十年を経て延べ十里ぐらゐ拡大され

たこととなっている。十里から二十里までの郷内および隣郷の地域は寺北柴村の遠方婚受け入れ地域として存在していると言えよう。

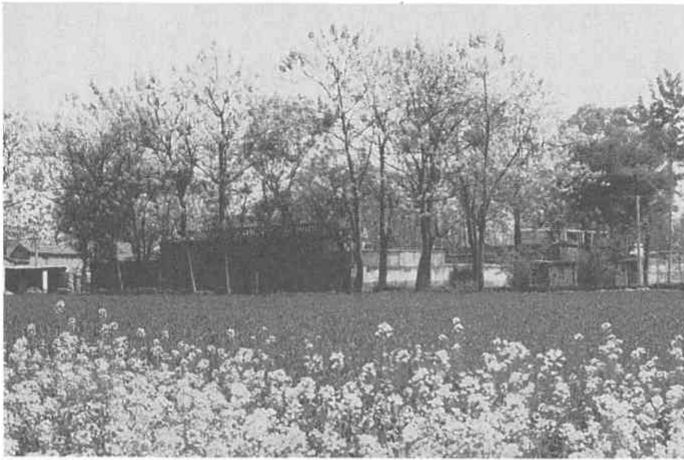
通婚距離と関連づけて通婚圏の変化を捉える発想から見れば、交通条件の改善などによる地理的縮小がこの変化に寄与していると考えられる。しかし、農民の社会活動は、基本的に親族や婚姻関係を基軸として展開されるとするならば、通婚圏の拡大は農民の社交ネットワークまたは活動空間の拡大とも言えるだろう。社交ネットワークは農民のライフ・サイクルが描いた軌跡として把握することができることから、その拡大の程度は農民の社会的モビリティの発現として農民生活の富裕化程度と関連すると同時に、農民の社交活動の開放あるいは閉鎖の程度を意味しているのではないかと、われわれは考える。

恋愛婚の出現と媒妁婚の変容

厳密に言うならば、配偶者選択のメカニズムの中で選択の範囲とともに重要なものは、選択の主体である。学界では従来、いかなる人物ないしは集団によって結婚相手の選択が行われるかが問題とされ、当事者が自らの意志で配偶者を選択する「恋愛婚」と当事者を含む家族・親族によって選択が行われる「媒妁婚」（調整婚）に区別されている。一九四〇～九〇年代の五十数年間、寺北柴村における結婚

相手選択のメカニズムにはどのような変貌が見られたらうか。

一般的に旧中国では、自由な恋愛結婚や本人同士が合意してする見合結婚は、封建的家長制に反抗する反逆的精神をもつ結婚ということで非難の対象として長く語り継がれてきたが、伝統的な農村、例えば寺北柴村においても、一九四〇年代の時点でこのような結婚の事例を発見することは困難であった。そこにあったのは親が媒妁人を通じて結婚相手を探し、親がそれを決めるといった古来の「包弁の見合結婚」であった。例えば『中国農村慣行調査』の応答録に次のような会話がある。（旧慣を尊重して新しい法律は余り行われぬの続き）「民国の法律ができて困ったことはなかったか」困ったことはないが「自由結婚」や「父子平等」は無用だ。民国の法律で実行できるものは実行しているが、右のようなことは古い習慣があるので実行しなくても罪にはならない、私が今まで話したことは皆古来からの習慣だ、「自由結婚はないというが親がきめるのか」然り、「父母の命」「媒妁の言」によってきまる、「最近若いものが自分で嫁を選ぶことはないか」ない、そんなことをすると擲てられる。三綱五常によるのだ」と。その時代において、親の権威は至上的であって婚姻当事者もほとんど反抗できなかったことは、十三歳で結婚した郝進堂の婚姻についての父親郝抓子の応答から判断できる。「息子の



華北の農村

進堂には定親のことを直ぐ話したか、小帖の交換、請客の時に息子は自然知った。自分から特別に話をしなかった。「息子は定婚前または定婚後にその姑娘に会ったことがあるか、結婚するまで一度も会ったことなし」、「いつ姑娘の顔を見るか、結婚してから」、「嫁にきてからはじめて会って気に入らない時はどうするか、盲目でもびつこでも没法子」と。

解放後、婚姻法の発布とともに、こうした包弁婚姻が次第に姿を消していった。結婚前に一度もあつたことのない相手と結婚した劉WSの話によると、そのころは離婚が割合多かつたが、その原因は「みな包弁結婚だったので感情不合だつた」ためとされる。彼自身も一九五二年に法院へ行って離婚の手續きをしたという。また六十二歳の董冬姐の証言によれば、「あの時ある娘が騒ぎをおこし、包弁(結婚)に反対して絶食もした」、これは婚姻法がよく宣伝された効果であつたという。五十年間が経って、一九九〇年代の寺北柴村においては、包弁婚姻のケースがまったく見当たらず、状況は大きく変化した。その表われの一つは自由恋愛結婚の増加である。

解放前、婚約者同士が結婚以前にほとんど会えない理由の一つとしては、二人が会ったら他人に笑われ、うわさの種にされるということがあげられていたが、七十歳の王桂榮の話のよると、「もう今は思想が変化し、かまわなくな

った」という⁽⁶⁾。二十代の王世新も同様の証言をしている。すなわち「自由恋愛をすると村でうわさの種にされるかそんなことはない」、「今でも包弁結婚があるかもうない」と⁽⁷⁾。現在の寺北柴村では、八〇―九〇%の結婚が紹介によって配偶者を決定したものはあるが、こうした自由⁽⁸⁾に交際できる環境の中で、「ここ数年、自由恋愛が増えてきている」とも言われている⁽⁹⁾。実際の例を見てみると、われわれの取り上げた六十七組の婚入者の中、恋愛で結婚したカップルは一組であった。当事者の証言によると、一九四九年に寺北柴村に生まれた趙書貴が一九六九年に同村小学校の民弁教師となった同時期に、石家荘から下放してきた知識青年である杜秋姐も同じ職場で教鞭をとっていた。仕事の関係で二人は付き合いを始め、そして恋愛し、一九七二年冬に「他人の紹介によらず結婚した」⁽¹⁰⁾。現在、夫は校長として、妻は国弁教師として、お互いに協力しながら北五里鋪小学校に勤務している。これはおそらく寺北柴村の最初の恋愛結婚であろう。

ここに言う「媒妁婚」とはただの「形式」だけで、その内容はすでに変容していることに注意すべきである。現在の「媒妁婚」を解放前のものと比べてみれば、同じく仲介者がいるとはいっても、その内実は「父母包弁」から「自主結婚」へ変容された。周知のように、「父母包弁」は配偶者選択を含めた婚姻の全過程が父母によって掌握されている婚姻であり、当事者の意志は尊重されない完全な媒妁婚である。このような家長制的な伝統的婚姻は一九四〇年代の寺北柴村の婚姻の基本パターンとなっていた。一九九〇年代においては、表面的には親族や親戚などといった紹介者はまだ存在しているが、父母が基本的に婚姻当事者の意志を十分に尊重すること、当事者が相手との交際を経て自主的に婚姻の可否を決めるといった「見合いをして恋愛する」ことが基本的なパターンとなっている、筆者はこれを「自主結婚」と呼ぶことにする。

現在の寺北柴村では、婚姻当事者は結婚を自分の「終身大事」(一生の重大事)と認識して、相手との恋愛段階を経てから結婚するという気持ちが強くと、愛情を重視する傾向が進んでいることが看取できる。このことに関しては、いくつもの事例が挙げられる。たとえば現在四十代の王淑芝と郝小寿は、郷親の紹介で知り合ってから半年で結婚したが、この間に、「親と相談し、不満がなかったので決めた」、そして「決まってから一度石家荘に遊びにいき、公園で遊ん

だ」という。お互いの交際時期はまだ短いが、恋愛の段階は確かに設けられている。一九九四年から婦女主任に就任した張菊婷と李欒秋との結婚にも恋愛の段階があった。二人はまず各自の親戚の紹介で付き合いを始めた。後に、李は兵隊のため部隊に帰ったが、お互いに手紙を通じての文通交際を経て結婚に至っている。三十代の劉増利は辜榮珍と知り合ってから一年間ぐらいで結婚したが、その間の付き合い方については、本人が「何度か映画を見て、石家荘に行き、(一緒に)商店をまわった」と回想した。当時、紹介人が彼に彼女の印象を聞く場合もあったが、彼は「われわれは自分たちで連絡できる」と答え、これから自分たちのペースでやるとの自主結婚の意志を強く示したという。

当事者以外の村民に対しても、われわれは恋愛結婚のことを民俗研究の課題として取り上げて質問した。たとえば、次のような応答がある。「今、農村では、恋愛する人が多いか。自由恋愛した人もいるが、農村では見合い結婚が多い。まず見合いをして、そして恋愛する。例えば二人で石家荘へ遊びに行ったりするとか、普段はよくつきあったりするとか、だんだん感情が深くなるのだ」、その後、当事者の二人が「気が合う」のなら婚約する、そして大体一年間か半年ぐらい経ったら挙式をするという。現在の寺北柴村においては、こうした自主結婚の傾向がきわだって多い

ことが上記の農民たちの言葉から理解できる。

「媒妁婚」の内実の変容は「仲介人」の性格の変化からもうかがえる。一九四〇年代、寺北柴村における伝統的見合い結婚には「仲介人」が「媒人」と呼ばれていて、その果たす役割は大きかった。また、「媒人」となれるのは同族親戚、郷親それぞれあり、その性格は一概にいいないが、基本的には年寄りや当事者の親の世代の人が多いようであった。現在はこうした「媒人」の変わりに「紹介人」と呼んでおり、「紹介人」は親世代より同世代の友人の方が多く、いと村民たちが語っている。すなわち「媒人は老人か。決まっていない。昔は老人の媒人が多かったが、現在は自由恋愛で青年の友人が紹介人になる」。「現在若者が結婚相手を探す時に『媒人』に頼むか。頼まない。紹介人がいる。すべて若者が友達同士で紹介している。これは昔の『媒婆』とは違う」と。農村の若者がお互いに協力して自主的に結婚しようという意欲が、われわれ調査員に強い印象として残っている。

貧富格差の影響は通婚に及ぶ

最後に寺北柴村の終身未婚者のことについて簡単に触れておく。解放前、同村は近隣地域でも名高い貧村であり、村民の生活は非常に貧しく、多くの人は長工・短工によって生活を維持していた。そのため、周辺の村には「粟のヌ

プはもううんざりだ、(毎日) 白ひきするのはもううんざりだ、ぬかもち食うのはもううんざりだ、娘があつても柴村の人には嫁がせない」という歌謡が伝えられていた。

一九四〇年代の慣行調査の記録を調べてみると、その時点で、貧困のため、三十歳になつてもまだ結婚できない男性が少なくとも二十人ぐらいた。

解放後、このような状況は根本的に変わったが、村民の間に「一年に七、八万円を稼ぐものもいれば、一年に二、三千元しか稼げないものもある」、貧富の差は「非常に大きい」ということで、生涯結婚できない人がまだ存在していることは蔽いえない事実である。一九九四、九五五年の時点で、五十歳以前に結婚できなかった人、恐らく終身未婚となる男性は、われわれの知り得たかぎりでも、少なくとも四、五人はいる。そのうちの一人である徐XY(六十七歳)は筆者の質問に次のように答えてくれた。「いつ結婚したのか、結婚したことがない」、「どうして、その条件がなくて、私には嫁の来手がなかった」、「一九五〇年に中央政府は新しい婚姻法を公布した。売買婚を禁止し、婚姻自由を提唱する。当時、あなたは知っていたか、知っていた」、「なぜ配偶者を探さなかったか、生活のことさえまならなかったのに、ましてや配偶者を探すことなど考えられなかった」と。また、われわれは他人との話の中でもこの問題を取り上げた。「この村では、貧富の格差が大きいかど

うかを知りたいが、小さくないと言える」、「例えば、誰の生活が一番貧しいか、具体的には私もよく分からないけど、郝B乙、郝丁兄弟は、割に苦しい生活をしていると、みんながよく言っている」、「あの兄弟は二人で生活しているか、そうだ」、「二人とも結婚していないか、していない」、「貧乏のため結婚できなかったのか、暮らしは比較的にきゅうきゅうとしているだろうね」、「二人は大体何歳だろうか、若い方でも五十歳ぐらいだ」と。何らかの方法を講じて村民の共同富裕の道を通き、貧困が原因で結婚できない村民が存在する条件を消滅することは、寺北柴村の指導者に期待される一つの重要な責務であろうとわれわれは痛感した。

むすび

寺北柴村は、中国に数十万個ある村落の中でごく普通の一つにすぎないが、特別な事情からその名は広く知られている。というのはい九四〇年代の同村についての満鉄調査資料が存在することから、それ以後同村の経済や社会的動きは今なお世界各国の研究者に注目されているからである。今までわれわれは、寺北柴村の通婚関係を中心にその伝統と変革を考察してきた。以上を踏まえて最後にまとめて今後の課題について触れておこう。

寺北柴村は樂城県城に近接し、河北省都の石家莊にも遠くないところにあり、交通も非常に便利であるが、経済の發展は周りの諸村落と比べて大いに後れをとっており、村民の生活も相対的に貧しい。一九四〇年代の「貧村」という「伝統」から脱皮することはまだ十分に達成できていない。その原因の一つとして考えられるのは、村民の情報不足や事業を起す際に必要な強力な協力者・後援者が少ない等農民の社交圏と関連する諸要因である。農村の通婚圏が農民の社交圏と重なる関係にあることは前述の通りであるが、寺北柴村の現在の通婚圏は、一概に閉鎖的でもなければ、また十分に開放的であるともいえない。今後、通婚距離もより拡張されて、通婚圏がもっと拡大されれば、農民の社交ネットワークもそれにつれて拡がり、経済發展にも役立つことだろう。また逆に、情報流通や経済的發達は通婚圏や社交圏の拡大にもかならず良い影響を与えるに違いない。

伝統的要素と変革的要素とが共存しつつ変容していく状況は、寺北柴村の特徴であり、また中国農村社会の特徴でもあると言えるだろう。従来、われわれは近代化を考へる際、「伝統」イコール「封建的」という想定をもって、社会の近代化を阻害するものとして批判する場合が多かった。しかし、中国農村の独自の環境のもとで生き続けてきた一部の「伝統」はすでに変容し、伝統的な外殻の内部で

近代化が進行しつつある。前述の「媒妁婚」はその中の一つである。中国農村の近代化過程は、大都會のそれよりも遙かに緩慢なものであり、「伝統」の長期的な変容を伴いながら、変革は社会の深部へと漸進的に進んでいくのがその特徴であろう。厳密に言えば、中国農村社会は近年目覚ましい変化を遂げたと言っても、近代化はいまだ成し遂げられていないし、そのために克服すべき多くの困難を抱えていると言ふこともできる。先進工業国の反近代化論者の立場から見れば近代化は社会の病根になるさまざまな弊害を生み出しているということもできるかもしれないが、發展途上国たる中国の農民にとっては、近代化とは物質的水準と文化的水準の向上、つまり人間の幸福に接近する一つの過程を意味するものにはかならない。こうした幸福を得しようとするならば、工業・農業・副業を發展させる以外に眞の近代化を成し遂げる道は開けないだろう。

注

〈1〉三谷孝編「農民が語る中国現代史——華北農村調査の記録——」八頁、内山書店、一九九三年。

〈2〉「中文版序」、黄宗智「華北の小農經濟与社会変遷」、中華書局、一九八六年。

〈3〉この言葉は田島俊雄が用いたものである。詳しくは田島俊雄「中国農業の構造と変動」(御茶の水書房、一九九

六年)二九頁を参考されたい。

〔4〕 辻田順一の訪問記録は石田浩の手で取りまとめられ、石田浩『中国農村慣行調査』研究と欒城県寺北柴生産大隊の訪問(『東方』第三六号、一九八四年三月)として発表された。河北省欒城県地方誌編纂委員会編『欒城県誌』新華出版社、一九九五年、七七頁。

〔5〕 川井悟「中国河北農村の參觀から」(『同朋』第七八号、一九八四年十二月)、石田浩「華北農村調査の成果と今後の課題」(『東方』第四八号、一九八五年三月)、石田浩「中国農村社会経済構造の変容分析——河北省欒城県孟董莊郷寺北柴村と山東省歴城県冷水溝村の調査事例——」(『経済論集』第三六卷第六号、一九八七年三月)。

〔6〕 小林弘二「中国農村見聞記——『慣行調査』の村はどうか変わったか——」(『アジア経済』第二六卷第四号、一九八五年四月)、前掲『欒城県誌』七九頁。

〔7〕 内山雅生「中国華北農村參觀の旅」(『近きに在りて』第十一号、一九八七年五月)、秦惟人「華北農村の印象と郷鎮企業——中国社会経済史学術交流訪中団に参加して——」(『同前』)。

〔8〕 三谷孝「中国農村參觀の記録(一九八八年四月～六月)」一九九〇年五月作成、私家版、八～一二頁、前掲『欒城県誌』八三頁、外事弁供稿「我県的外事活動」(『欒城県文史資料』第二輯、二一九頁、一九九二年十二月)。

〔9〕 前掲『欒城県誌』九二頁。

〔10〕 通婚圏の基本については次の研究を参考されたい。合

田栄作「通婚圏」大明堂、一九七六年、小山西隆「通婚圏の意味するもの」(小松堅太郎編『社会学の諸問題』有斐閣、一九五四年所収)。

〔11〕 石田浩「旧中国農村における市場圏と通婚圏」(『史林』第六三卷第五号、一九八〇年)。

〔12〕 一九四〇年代から「莊稼人嫁給莊稼人」は寺北柴村の基本となっているようである(中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』第三卷、一〇〇～一〇二頁、岩波書店、一九五五年)。

〔13〕 地理的通婚圏と社会的通婚圏については、次の研究を参照されたい。鈴木透「日本の通婚圏・地理的通婚圏」

『人口問題研究』第一九五号、一九九〇年七月、同「日本の通婚圏・社会的通婚圏」(『人口問題研究』第一九七号、一九九一年一月)、小島泰雄「通婚圏と配偶者選択——中国農村における婚姻の空間研究の前提——」(『神戸市外国語大学外国学研究所研究年報』第三二号、一九九三年)。

〔14〕 ここでいう「完全情報」とは、婚入者の場合は出身地、年齢、夫の基本情報などを完全に把握しており、しかも調査の時点で二人とも健在である事例を指して言う。婚出者の場合は年齢、嫁ぎ先などの情報を完全に把握していることを指す、同様、物故した人の例は含めていない。

〔15〕 前掲『中国農村慣行調査』第三卷、三四頁。

〔16〕 前掲『中国農村慣行調査』第三卷、一四八頁。

〔17〕 中生勝美調査記録、一九九五年二月十八日午後、寺北柴村にて。

- 〈18〉 リンダ・グロープ調査記録、一九九五年二月二十二日午後、寺北柴村にて。
 〈19〉 中生勝美調査記録、一九九五年九月九日午前、寺北柴村にて。
 〈20〉 石田浩前掲「旧中国農村における市場圏と通婚圏」。
 〈21〉 前掲「中国農村慣行調査」第三卷、八八頁。
 〈22〉 前掲「中国農村慣行調査」第三卷、一〇一頁。
 〈23〉 浜口允子調査記録、一九九五年二月十八日午後、寺北柴村にて。
 〈24〉 末次玲子調査記録、一九九五年九月七日午後、寺北柴村にて。
 〈25〉 末次玲子調査記録、一九九五年九月八日午後、寺北柴村にて。
 〈26〉 末次玲子調査記録、一九九五年九月十日午後、寺北柴村にて。
 〈27〉 笠原十九司調査記録、一九九五年九月九日午後、寺北柴村にて。
 〈28〉 笠原十九司調査記録、一九九五年九月十日午後、九月十三日午前、北五里鋪にて。
 〈29〉 一九九五年九月に行われたアンケート調査の結果によると、「どうやって知り合ったか」に対して、三十七名の既婚女性のうち、三十六人が「人の紹介による」と答え、一人は回答しなかった。この結果も上記の判断を裏付ける（末次玲子「寺北柴村のジェンダー」、一九九六年八月、未発表）。
- 〈30〉 浜口允子調査記録、一九九五年二月二十日午前、寺北柴村にて。
 〈31〉 リンダ・グロープ調査記録、一九九五年二月二十一日午前、寺北柴村にて。
 〈32〉 リンダ・グロープ調査記録、一九九五年九月十二日午後、寺北柴村にて。
 〈33〉 李恩民調査記録、一九九四年十二月二十七日午前、寺北柴村にて。
 〈34〉 中生勝美調査記録、一九九五年二月十九日午後、寺北柴村にて。
 〈35〉 中生勝美調査記録、一九九五年二月二十一日午後、寺北柴村にて。
 〈36〉 「米飯湯灌死人、鞭鞭把擰死人、糠餅子噎死人、有女不嫁柴村人」（党支部書記郝元增「寺北柴村概況」による、一九九四年十二月二十四日樂城県招待所会議室にて）。
 〈37〉 浜口允子調査記録、一九九五年二月二十二日午後、寺北柴村にて。
 〈38〉 李恩民調査記録、一九九五年十二月二十五日午前、寺北柴村にて。
 〈39〉 李恩民調査記録、一九九五年九月九日午前、寺北柴村にて。
 〈40〉 中国における近代化の意味や農村社会近代化の特殊性については、次の研究が示唆に富んでいる。岡部達味「中国は近代化できるか」日本経済新聞社、一九八一年。内山雅生「近代化と農村社会」（池田誠・上原一慶・安井三吉

編『中国近代化の歴史と展望』、法律文化社、一九九六年、
二〇二～二一八頁。

〔本稿は平成六、七年度文部省科学研究費補助金国際学術研究『中国農村変革の総合的研究』（研究代表者三谷孝一橋大
学社会学部教授）の研究成果の一部である。〕